

# 錫釉色絵タイルの回帰

Spanish Majolica Tile

author 竹多 格 | Itaru Takeda

ただだ・いたる—— INAXライブミュージアム主任学芸員/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(現・INAX)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

## [クローズアップ・タイル]

### 錫釉色絵紋章組絵タイル—— 1

錫釉色絵は、白色の原料に恵まれなかったイスラームの陶工が考案した技法で、錫を加えた釉薬で下地を白く化粧し、色を鮮やかに発色させる技法。白地多彩のひとつ。12枚組みの組絵タイルとして制作されたこのタイルは、サポーターのキューピッド、楯、冠、花飾りなど、紋章の要素が描き込まれており、陶製の紋章として風雨に耐えるものとして重宝され、戸外の壁に嵌め込まれて使われた[19世紀/410×550×15mm/スペイン]



## [タイルのデザイン]

### タイルの文様—— 2-4

色彩や図柄は、15世紀を境に徐々にイタリアで発達したマジョリカの特徴を反映している  
2—白地多彩草花文タイル[16世紀/115×113×25mm]|3—白地多彩果実文タイル[17-18世紀/210×215×18mm]|4—白地多彩人物文タイル(物売りの婦人)[19世紀/200×198×15mm]|いずれも制作地はスペイン

## [タイルのある風景]

### 歴史的建造物に見られる16世紀のスパニッシュ・マジョリカタイル—— 5-6

マジョリカの特徴ある図柄のひとつで、人や動物の姿が植物の形に変容していくグロテスク文様が描かれたタイルが張られている  
5—典型的なグロテスク文様のタイル|6—1570年代制作のタイルが張られた礼拝堂



- 8世紀からイベリア半島に花開いたイスラーム文化のもとで、錫釉色絵とラスタースは独自の技法として発達した。13世紀中頃からは、土地の陶工たちも「イスパノ・モレスク」(=スペインで焼かれたイスラーム風やきもの)をつくり始めた。15世紀末にレコンキスタの達成で、イスラーム勢力が北アフリカに追放されると、それまで盛況だったコルドバ、セビリアなど半島南部の窯場に代わって、東部バレンシア地方の窯場が主要な産地となった。そしてこれらの地域から、イタリア領となったマジョリカ島を経由してイスパノ・モレスクがイタリアに輸出され、中継地の名前をとって「マジョリカ」と呼ばれて人気を博した。マジョリカは、15、6世紀のイタリアルネッサンスのもとで、イスラーム風を脱却し、色彩も装飾モチーフも多様化し、ヨーロッパ近世を代表するやきものとして発達した。
- やがて、マジョリカは、アルプスを越えてドイツやオランダ、フランスに伝播し、一部はスペインへも回帰した。東部のマニセスやバルテナでは、イタリアからスペインに移住した陶工もあり、イタリア・マジョリカの影響を受けた錫釉色絵の陶器やタイルが作られた。これらスペインで作られたタイルのことを、「スパニッシュ・マジョリカタイル」と呼ぶ。
- 装飾モチーフは、15世紀後半から人文主義のルネッサンス様式が浸透し、さまざまな図柄が描かれるようになった。例えば、神話や歴史をテーマにしたもの、花飾り、リボン飾り、キューピッド、天使、動物、果実、紋章、奇怪な人物や空想動物を描いたグロテスク文様、人物主題のものなどである。色は、従来の青、赤、緑、黄、紫にイタリアで考案された橙色、濃いコバルトブルーが加わり、より色彩豊かなものになった。
- スペイン南部にあるセビリアのアルカサル(城郭)は、14世紀半ばにペドロ1世が創建したムデハル様式の王宮である。その後15-16世紀に数代にわたる改修を受けたため、ゴシック様式やルネッサンス様式も混在しているが、カルロス5世の時代の改修で現在の姿に至っている。ここには、黄色をベースにしたイタリアのマジョリカの影響を受けたタイルが張られており、その美しさを醸し出している。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

